

寂蓮の私撰和歌集入集歌について

——『言葉集』『月詣和歌集』『玄玉和歌集』『万代和歌集』を中心として——

半 田 公 平

一

寂蓮の私撰和歌集入集歌は、生存時の作品として『言葉集』『月詣和歌集』『玄玉和歌集』がある。没後成立の作品は数多くあり、『御裳濯和歌集』を初めとして『万代和歌集』『雲葉和歌集』『夫木和歌抄』『拾遺風艸和歌集』『新三井和歌集』『二八要抄』『六華和歌集』『光俊集』『後葉和歌集』等がある。その他、『題林愚抄』、『明題和歌全集』を資料として成立した個人名を冠した私撰集である、『資賢集』『為兼前集』『元可集』『義満公集』『済継集』等、また、『明題拾要鈔』『類題和歌集』等に入集している。

本稿では表題の四私撰集を採りあげ考察を加える。最初にそれぞれの私撰集の従来の研究を基として、作品の撰者、書名、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで拙著^①において考察を加えなかった、それぞれの私撰集のみ入集の独自歌について、詠歌年時、出典、歌意、本歌取歌、影響歌等についてみる。引用の和歌は『新編国歌大観』所収本に拠り、寂蓮歌の私撰集入集番号を歌頭に『新編国歌大観本』に拠って示した。

二 『言葉と歌集』

この作品の従来の研究については、安井久善・井上宗雄⁽³⁾・松野陽一⁽⁴⁾・有吉保⁽⁵⁾・長谷完治⁽⁶⁾・今岡典和⁽⁷⁾・岩坪健^(7・8)・赤瀬信吾⁽⁸⁾・拙稿⁽⁹⁾の各氏に拠って考察されている。撰者・成立・内容等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

従来、『言葉集』は、『和歌色葉・上』『八雲御抄』(巻二)『代集』等の文献に名をとどめながら散佚した私撰集とされてきた。その後周知の如く冷泉家から巻十一より巻十六までの四〇二首収録の零本が発見、紹介された。寂蓮歌も三首入集しており、その内の二首は新出歌である。

撰者は惟宗広言である。広言については前掲井上宗雄氏の精細な考察がある。平安末期の歌人。日向守基言の男。生没年未詳。一説に、承元二(一一〇八)年没、七十五歳(朝河貫一氏)。永暦元(一一六〇)年より寿永元(一一八二)年の間少監式部。文治二(一一八六)年五位筑後守。家は代々大宰府官を務めた。崇徳院の歌合に詠進したのを初めとして、承安二(一一七二)年十二月『広田社歌合』、治承二(一一七八)年三月『別雷社歌合』等に出詠。文治三(一一八七)年七月『貴船社歌合』(散佚)への参加を最後としてその後は不明である。歌林苑会衆の一人。後白河院の今様の弟子の一人であり、今様の才を評価された。家集に『惟宗広言集』(寿永百首家集)があり、『千載集』初出で五首、『玉葉集』に一首、その他私撰集等にも入集している。

成立は、前掲^(8・A)の解題で赤瀬信吾・岩坪健両氏は、「承安二年(一一七二)一二月以後、文治四年七、八月ころ以前、月詣和歌集に前後して成立したとしておくのが穏当と思われる。」とされ、井上宗雄氏もその説に従っておられる。松野陽一^(4・C)氏は、「本集の成立期は確定していないが、治承元〜二年(一一七七〜七八)頃の線を想定して論を進める。」としておられる。

内容は、前掲の如く巻十一より巻十六の零本である。構成は、巻十一・恋上(一一八三)・八三首、巻十二・恋中(八四〜一

四九）・六六首、卷十三・恋下（二五〇～二二七）・六八首、卷十四・雑上（二二八～二九六）七九首、卷十五・雑下（二九七～三四七）・五一首、卷十六・述懷（三四八～四〇二）・五五首、合計四百二首である。

前半十卷の構成について松野陽一^(4.c)氏は、

ただ、恋・雑の歌数の規模から見ても、全体で千首を越えることはないのではないか。また、恋下、雑上下、述懷で、三度も四季・雑の配列が繰り返されるところから、前半十卷の大半は四季歌で、全体としても四季・恋・雑の構成をとる（極端には春三・夏二・秋三・冬二。後撰集の夏・冬を上下に割った形）可能性もあったのではないかと。となると、前期の哀傷以下の部は卷十七以下に入って二十卷構成となるということになる。

としておられる。また、恋下部が寄物型恋題で、堀河百首題の組題に基本を置く配列構成がなされていることを考察しておられる。

入集歌人は、赤瀬信吾・岩坪健^(8.A.B)両氏の調査に拠ると、二〇〇名あまり、古いほうでは、四条宮下野や周防内侍など、一世紀後半の歌人もみられるが、大半は一二世紀に活躍した、広言にとって前代および当代の歌人たちである。入集歌数の多いのは、藤原俊成・源頼政・登蓮・七首、藤原清輔・顕昭・藤原公光・藤原実家・六首と、当代の有名歌人である。寂蓮は「藤原定長」の俗名で三首入集している。寂蓮歌を示す。

卷十一・恋上

（夜恋の心を）

藤原定長

五四 おもひねのゆめだにみえであけゆけば

あはでもとりのねこそつられ

卷十一・恋上

（被返恋）

藤定長

七七 こぬまでもまつはたのみのあるものをゆきてくやしきけふのくれかな

卷十四・雑上

公通卿家にて、晚霞といふ事、人人よみ侍りけるに 藤原定長

二二七 さとのあまのとなりたづねにこぎゆけばかすみたちめくあはのしま山

以上三首の内五四番歌は、『寂蓮家之集』（部類本・五三番）『寂蓮集』（雑纂本・一六六番）『治承三十六人歌合』（夜恋、右寂蓮、二七六番）『千載和歌集』（卷十二・恋二・七六五番）『月詣和歌集』（卷四・四月附・恋上、三七四番）に入集しており、承安二（一二七二年）八月十五日の成立とされている、「公通家十首会」の詠歌である。既に拙著^①において考察を加えたので該当の項を参照されたい（四四～四五頁）。

先ず七七番歌についてみる。

こぬまでもまつはたのみのあるものをゆきてくやしきけふのくれかな

この歌の前歌（大輔）の詞書に「被返恋」とあるのみで、詠歌年時、出典未詳の新出歌である。

歌意は、たといあなたがやってこなくとも期待して待っているのはかいがあるものを、それにしてもあなたの訪れがなくむなしく時が過ぎ去ってしまい、残念に思われる今日の夕暮れであるなあ。

寂蓮歌の上の句と同一の句を後の『続拾遺集』（卷十三・恋三、九〇七番）に入集している、

待空恋といへる心を

平頼泰

こぬまでもまつはたのみのあるものをうたて明行く鳥の声かな

と詠んでおり、夕暮を明方とし同趣向の歌であり、寂蓮歌の影響を承けているかと思われる。

次に二二七番歌についてみる。

さとのあまのとなりたづねにこぎゆけばかすみたちめくあはのしま山

この歌は詞書に「公通卿家にて、晚霞といふ事、人人よみ侍りけるに」とあり、五四番歌と同様の歌会、承安一（一二七二年八月十五日の成立とされている、「公通家十首会」の詠歌である。この歌会の証本は散佚しているが、寂蓮歌はこの「晚霞」題の他に「待郭公」「夏草」「夜恋」題の歌を見い出すことができる（拙著、二四・二五頁、二八頁、四四・四五頁の項参照）。

歌意は、里の漁夫が隣家を訪ねるために舟を漕ぎ出して行ったところが、淡路島のあたりに夕霞が立ちこめているようだ。

三 『月詣和歌集』

この作品の従来の研究については、谷山茂^⑩・松野陽一^⑪・谷鼎^⑫・島津忠夫^⑬・杉山重行^⑭・多賀宗隼^⑮・川上新一郎^⑯・大取一馬^⑰・有吉保^⑱・拙著の各氏に拠って考察されている。撰者・書名・成立・内容・伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

撰者は、賀茂重保が祐盛の助力を得て編纂した。

書名は、序文に「十二月の宮まりの歌をつらねて……おなじくこころをあはせてたのみをかけあゆみをはこびたてまつる人人、そのほかのことはあつめて月詣集となづく」とあるように、賀茂別雷社に月参する人々の歌を集めたところからいう。

成立は、寿永元（一二八二年十一月に賀茂別雷社へ仮奉納され、翌二年撰者の手許に戻されて一部の作者表記などが書き改められて成立した）。

内容は、仮名序、真名跋があり、序文に「千二百首を十二巻にわかちて、我がすべら御神のみづがきのうちにをさめてまつりて、あそびたはぶれのえんむなしからずなすべきなり」とあるように、千二百首を正月附賀・二月附別部・三月

附羈旅・四月附恋上・五月附恋中・六月附恋下・七月附雜上・八月附雜中・九月附雜下・十月附哀傷・十一月附神祇・十二月附釈教の十二卷に部類した。しかし、現存諸本には卷八全巻と卷十一後半等に欠脱があり、最も所収歌数の多い続群書類従本によっても一〇七七首である。

入集歌人は現存本に拠ると二八八名。『詞花集』成立以後活躍したと思われる歌人が大部分で、中でも歌林苑の会衆、藤原（九条）兼実家関係、平家一門に属する歌人等が大勢を占めている。入集歌数は、藤原俊成の二九首を最高として、俊恵・二五首、重保・二四首、藤原実定・十八首、円位（西行）・十七首、九条兼実・藤原頼輔十六首、顕昭・藤原長方十五首等であり、定長（寂蓮、以下は寂蓮とする）は十一首入集している。

撰集資料は、家集・歌合・定数歌が重要な資料となっている。家集についてみると、序文に「三十六人の百首をあつめて神の御たからにそなふ」とあるように重保が三十六人の歌人に賀茂社奉納百首（寿永百首家集）を求め撰集の資料とした。現在寿永百首家集として認定されている集については、谷山茂⁽²⁰⁾・森本元子⁽²¹⁾・杉山重行⁽²²⁾・松野陽一⁽²³⁾・井上宗雄⁽²⁴⁾・有吉保の各氏の考察がある。『寂蓮集』（部類本）もその一集と推定されている。

撰集資料の家集以外では「按察使藤原公通家十首」の詠歌、『別雷社歌合』『右大臣兼実家百首』『右大臣家歌合』等からの入集歌が多い。

伝本は、杉山重行氏^(14, D, E)が現存諸本二〇本を精査され、第一類～第四類に大別し、静嘉堂文庫蔵「続群書類従」卷三六八所収『月詣和歌集』（函架番号三〇三・三）を底本とし、諸本に拠り校異を示しておられる。『新編国歌大観 第二巻』所収『月詣和歌集』も杉山氏^(14, D)担当であり、以下その本文に拠る。

寂蓮の入集歌は十一首ある。以下入集番号を記す。卷二・二月附別部・一五二、卷四・四月附恋上・三二三、同三七四、卷五・五月附恋中・四二一、卷六・六月附恋下・五二二、卷九・九月附・雑下・七七六、同・八〇〇、同・八〇一、同・八五一、卷十・十月附哀傷・九〇四、同・九四二番歌である。以上の内八首は他の撰集等に入集しており、三首が『月詣

集』のみ入集の独自歌である。和歌を示す。

卷二・二月附別部

賀茂重保が越中国へくだりけるを、おなじところにて人人餞し侍りけるによめる 藤原定長

一五二 秋のうちにかへる山とは契れどもゆきふることやあらんとすらん

卷九・九月附雑下

(暮秋の心をよめる)

藤原定長

七七六 ふく風にをばながすゑをむすばせて暮行く秋や旅ねしつらん

卷九・九月附雑下

山里より人のもとへ遣しける

(藤原定長)

八〇一 心から馴れし都をはなれきて人もすさめぬねをのみぞなく

先ず一五二番歌についてみる。

秋のうちにかへる山とは契れどもゆきふることやあらんとすらん

この重保の餞別歌は他に敦仲・俊恵が詠んでおり、詠歌年時について杉山重行氏は、俊恵の『林葉和歌集』に入集して²⁶おり、その成立は治承二(一一七八)年八月二三日(二三日とも)と推定されており、それ以前の作とする。敦仲の歌は『月詣集』の寂蓮歌の次に以下の如く入集している。

一五三 かへる山ありとたのまぬ道ならばなぐさめもなき別ならまし

俊恵の歌は『林葉和歌集』(第六・雑・別、九八八番)に

賀茂神主重保こしの方へまかり侍りしを、また、歌林人人餞し侍りしかば

九八八 君だにもまだこえなくにあやなくも心にかかるかへる山かな

とそれぞれ詠まれている。

寂蓮歌の詞書の意は、賀茂重保が越中国へ下向したので同じ所（歌林苑）で、人人が餞別をしました時に詠みました。歌意は、秋の季節のうちに帰る山で都へ帰ると約束をしたけれども、雪の降ることがあるうとどうしていうのであろうか。

「帰山」は、片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典』（昭和58年12月、角川書店）の同項目に拠ると、

越前国の歌枕。今の福井県南条郡今庄町から敦賀市杉津に出る途中の山。「帰る」と掛詞にして多くよまれた。雪深い越路にあるため「白雪の八重ふりしける帰山かへるがへるも老いにけるかな」（古今集・雑上・棟梁）のように雪の深い所の比喻でよまれることが一般的であり、また「越」「越路」の地名とともによまれることも多かった。また都から遙かな越へ旅立つ人との離別の際に、再び都へ帰ることを願ってよんだり、「旅」「別」「雁」などの題詠によまれることが多く、「帰山ありとは聞けど春霞たちわかれなば恋しかるべし」（古今集・離別・利貞）や「春深み越路に雁のかへる山名こそ霞にかくれざりけり」（拾遺愚草）などとよまれた。としておられる。

寂蓮歌は片桐氏の指摘の如く、「帰山」と「都へ帰る」を掛詞とし、都から越の国へ旅立つ重保に再び都へ帰ることを願う餞別の歌として詠んでいる。

下句の「ゆきふることやあらんとすらん」については、『千載集』（巻六・冬・四五九番）、『頼政集』（八五番）に入集している、

（雪のうたとてよみ侍りける）

前右京権大夫頼政

こえかねていまぞこし路をかへる山雪ふる時の名にこそ有りけれ

の歌に詠まれているように、帰山とは雪が降る時に由来する名である、を踏まえて詠んでいるかと思われる。

俊恵歌（九八八番）は「賀茂神主重保こしの方へまかり侍りしを」と「こしの方」としているが、越は越前・越中・越後の三国の総称である。寂蓮歌の詞書は「賀茂重保が越中国へくだりけるを」と「越中国」としているが「帰山」は『能因歌枕』『五代集歌枕』『名所歌枕』『類字名所和歌集』『松葉名所和歌集』『増補松葉名所和歌集』など「越前国」としており、誤りである。

次に七七六番歌についてみる。

ふく風にをばながすゑをむすばせて暮行く秋や旅ねしつらん

この歌の詠歌年時、出典は未詳であるが、作者名藤原定長とあり、承安二（一二七二）年頃出家以前の作かと思われる。歌意は、すすきの穂を風の吹くままに結ばせて、秋の季節が過ぎ去って行く折り、旅寝をしていることであろう。

次に八〇一番歌についてみる。

心から馴れし都をはなれて人もすさめぬをのみぞなく

この歌の詠歌年時、出典は未詳であるが、作者名藤原定長とあり、承安二（一二七二）年頃出家以前の作かと思われる。詞書に「山里より人のもとへ遣しける」とあるが、山里は何れの地か、贈歌の相手も未詳である。出家後は嵯峨・三井寺のあたりに庵を結び、都の周辺等へ旅をしている。七七六・八〇一番歌はその折りの心境をうかがうことができる。

歌意は、自分の心から馴れ親しんだ都を離れてきて、人も心をとめて慰めてくれなく、声を立てて泣くばかりであることとよ。

この八〇一番歌は拙著^{(19)A}において八〇〇番歌の作者「藤原定長」を受けるか否か疑問として収録しなかったが、寂蓮歌と認定し拙著の本文編の項に補う。

また、卷十・十月附哀傷、九四二番歌は拙著^{(19)A}において『続群書類従』（和歌部、第十四輯上、卷三六八）本を底本として集録したが、「題しらず 藤原定長」とあるのみで和歌が欠脱していた。杉山重行氏^{(14)E}の著書、九四二番歌の頭注に、「底本ノ群、

オヨビ類ハ歌詞部分欠脱、書ニヨリコレヲ補ウ」として

題しらず

藤原定長

942 降雪(底本歌欠脱)や木するゑにたかく積るらん声よはり行峰の松風

とあり、拙著(19・A)の本文編の項に補う。この歌は『寂蓮家之集』(部類本、四四番)に入集しており、既に拙著(1)において考察を加えたので省略する(四〇・四一頁参照)。他撰集入集歌については拙著の該当の項を参照されたい。

四 『玄玉和歌集』

この作品の従来の研究については、安井久善(27)・島津忠夫(28)・樋口芳麻呂(29)・佐山済(30)・山田昭全(31)・松野陽一(32)・有吉保(33)・青木賢豪(34)・拙著(35)の各氏に拠って考察されている。撰者・書名・成立・内容・伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

撰者は、真名序・仮名序から身分のあまり高くない僧侶、一説に上覚・降寛が挙げられているが、決定を見ていなく未詳である。

書名は「真名序」に「連巻軸、号曰玄玉和歌集而已」とあり、「仮名序」に「ちかきよのうたをあつめて玄玉の和歌集となづく」、また、「そもそも玄なれども、ききつたへざるはいたづらにもれぬ、玉なれども見およばざるはひろふ事なし」と書名の由来が記されている。

成立は、作者表記、出典資料等から建久二(一一九二)年に一応成立し、三年に増補して成ったかと推定されている。

内容は、真名序・仮名序があり、序によれば千余首の歌を十二巻に部類し、巻頭は神祇歌で始まり、巻尾は釈教歌で終ることになっているが、現存諸本は巻八以降の五巻約三百余首を欠脱した残欠本である。松野陽一(32・A・C・D)氏は欠脱部には鳥獸(虫)、雑か恋、釈教があつたかと推定しておられる。現存七巻は、巻一・神祇・四三首、巻二・天地上・六四首、巻三・

天地下・二四一首、卷四・時節上・四六首、卷五・時節下・六四首、卷六・草樹上・一八七首、卷七・草樹下・八八首に部類され、七三三首である。

入集歌人は現存本に拠ると、男子・七八人・四〇六首、僧・五〇人・二九〇首、女子・一三人・三五首、読人不知・二首、計一四一人・七三三首である。歌数の多い歌人は、俊成の五五首を最高として、良経・四二首、円位（西行）・三九首、定家・寂蓮・三二首、慈円・俊恵・三一首、公衡・二二首、家隆・隆信・二一首、兼実・一七首、崇徳院・一六首等である。僧侶歌人が多く、女流歌人が少ない。九条家の兼実・慈円・良経を中心とし、御子左一門の俊成・定家・寂蓮・家隆、その他西行・実定等、勅撰集で殆ど評価されなかった、隆寛・性我・宗円・覚範等の僧侶歌人が注目される。

撰集資料は、『久安百首』を上限とし、仮名序に「ちかきよのうたをあつめて」とあり、それ以後の成立である。九条家の兼実・良経主催の治承二（一一七八）年『兼実家百首』、文治六（一一九〇）年『女御入内屏風和歌』、建久元（一一九〇）年『花月百首』等、西行の『御裳濯河歌合』、『宮河歌合』、俊成の『五社百首』等の作品を中心として、文治・建久期に活躍した新人歌人達の詠作活動に資料の多くを求めている。

伝本は、松野陽一氏^(32:A・D)が(1)彰考館蔵一冊本（已五）、(2)高松宮蔵一冊本、(3)大阪府立図書館蔵二冊本（三四五・二八）、(4)群書類従本の四本を紹介しておられる。諸本の巻末に次の識語があり、

延慶三年庚戌三月廿八日於大和国添上郡辰市郷春福院書写之畢。深住興隆之思不願多情之眼而已 散位中臣祐仲

延慶三年（一一三一〇）までには卷八以下が失われていたらしく、現存諸本（いずれも近世中期以降の写本）間に大きな本文異同はないが、五一四・六〇六の二首を有する、前掲(1)(2)を甲本系統、これを含まない(3)(4)を乙本系統に分類しておられる。以下、(2)高松宮蔵本を底本とした、松野氏担当の『新編国歌大観第二巻』所収『玄玉和歌集』の本文に拠る。

寂蓮の入集歌は三二首ある。以下入集番号を記す。卷一・神祇歌・一二、同・一三、卷二・天地歌上・五〇、同・五五、

同・八八、同・一〇〇、天地歌下・一四一、同・一四二、同・一四三、同・一五二、同・一六三、同・一六四、同・二四一、同・三三四、同・三四四、卷五・時節歌下・四〇二、同・四二六、四三一、卷六・草樹歌上・四六八、同・五二一、同・五二二、同・五二三、同・五五一、同・六〇五、同・六二三、同・六三三、同・六四五、卷七・草樹歌下・六五九、同・六七九、同・七二〇、同・七二五、同・七三三番歌である。以上の内二五首は他の撰集等に入集しており、七首が『玄玉集』のみ入集の独自歌である。

前掲の卷二・天地歌上・一〇〇番歌は、

泉為夏棲といふ心をよめる

ふるさとは岩もる水にすみかへてよもぎや庭のあるじなるらん

の歌であり、作者名が表記されていない。前歌（九九番）は、

（題不知）

家隆

せきかぬる山水水をむすぶ手のしづくに秋の露ぞこぼるる

の歌であり、家隆の作者名を受けるものとして寂蓮歌と認定しなかった。しかし、この一〇〇番歌は、文治三（一一八七）年十一月『結題百首』（夏・三四番）の詠歌であり、後の『夫木和歌抄』（卷九・夏部三・泉、三六九八番）、『新類題集』（夏）にも入集しており寂蓮歌である。拙著の本文編の項に補う。和歌については既に拙著^①において考察を加えたので省略する（三七五・三七六頁参照）。以下『玄玉集』入集の独自歌について考察を加えるが、他撰集の入集歌については既に考察を加えたので省略し、拙著の該当の項を参照されたい。和歌を示す。

卷三・天地歌下

崇徳院さぬきの国におはしましける時、修行のついでに参りて、月のあかく侍りける夜、
よみて奉りて侍りける

寂蓮

一五二 むかしみし月は雲ゐの影ながら庭はよもぎの露ぞこぼるる

卷三・天地歌下

(寂蓮)

一六四 月さゆるみほが崎まで見渡せば氷をとほるしがのうら浪

卷五・時節歌下

旅泊初秋と云ふ心をよめる

寂蓮

四〇二 みなと河おなじうきねの浪の音もけさ立ちかはる秋のはつ風

卷六・草樹歌上

題不知

寂蓮

四六八 梅が枝に軒のしがらみかけてけり花のせきもるささがにの糸

卷六・草樹歌上

寂蓮

五五一 見わたせばならの都の花ざかり梢をこむるやへの白雲

卷六・草樹歌上

題不知

寂蓮

六三三 此世にて物思ふ袖もくたしけり雨そそきする軒の橘

卷七・草樹歌下

古池寒蘆といふ心をよめる

寂蓮

七二五 昔おもふ池にはいひもくちはててかれ野につづく蘆の上風

先ず一五二番歌についてみる。

むかしみし月は雲ゐの影ながら庭はよもぎの露ぞこぼるる

この歌の詞書に「崇徳院さぬきの国におはしましける時」とあるが、久曾神昇氏³⁶は次の如く考察しておられる。

— 崇徳天皇は長寛二年八月崩御あらせられたのであり、寂蓮二十六歳頃と推定せられ、さうすれば未だ出家する数年前のこととなる。この詞書には誤があり、「おはしましける時」とあるのは、「處」の誤であらう。讃岐を訪れたのも何時頃か分らないが、玄玉集に見えるので、建久二年より以前であらう。

久曾神氏は「時」は「處」の誤りであろうと指摘しておられる。『新編国歌大観』所収本の底本である高松宮藏本、その他、彰考館藏本、大阪府立図書館藏本、群書類従本も「時」とあるが「處」の意で解する。

寂蓮歌の詞書の意は、崇徳院が讃岐国に遷幸していらつしやった御所を、修行の折りに参詣して、月の明るかった夜、詠んで差し上げました。歌意は、月は、昔宮中で見た空の美しい光のままであるけれど、庭は荒れ果て蓬が生い茂り露が一面に置いていることだ（昔、院がご健在でいらつしやった頃が偲ばれ涙がこぼれることよ）。

崇徳天皇は、元永二（一一一九）年五月二七日生誕、鳥羽天皇第一皇子、母は待賢門院璋子（藤原公実の女）、実父は曾祖父白河院、諱は顕仁、保安四（一一三三）年即位、第七五代の天皇。保元の乱（一一五六年）に敗れ讃岐遷幸、長寛二（一一六四）年八月二六日、配所の讃岐松山で崩御、四六歳。崩御後の治承元（一一七七）年崇徳院と諡号された。

詠歌年時は、崇徳院の崩御（長寛二年）の頃、寂蓮は「中務少輔」の官職にあり、詞書に「修行のついでに参りて」とあるところから、承安二（一一七二）年頃、出家後のことかと思われる。『玄玉集』の成立が前掲の如く、建久二・三（一一九一・二）年の頃かとされており、久曾神氏の指摘されているようにそれ以前の詠歌かと思われる。寂蓮は文治六（建久元年、一一九〇）年春、出雲大社へ参詣し、建久二（一一九一、元年とも）年九月から十月に東国地方へ旅行しており、この歌一首のみであるが四国の讃岐国へ修行の旅をしたことが知られる詠歌である。

西行の『山家集下』（雑、一三五三―五五番）に、仁安三（一一六八、前年とも）年讃岐の崇徳院の配所に参詣した以下の歌がある。

さぬきにまうでて、まつやまのつと申す所に、院おはしましけん御あとたづねけれど、かたもなかりければ

まつ山のなみにながれてこしふねのやがてむなく成りにけるかな 一三五三

まつ山のなみのけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり 一三五四

しろみねと申しける所に、御はかの侍りけるにまゐりて

よしやきみむかしのたまのゆかとてもかからん後は何にかはせん 一三五五

最初の二首は崇徳院の配所に参詣した折りの歌であり、松山の津の院の配所の御跡（坂出市林田町字中川雲井の配所）が跡形もなくなっているのを詠んでいる。三首目は白峯御陵（綾歌郡松山村白峯）での詠歌である。寂蓮歌は配所の御跡を訪れての詠歌であらう。

次に一六四番歌についてみる。

月さゆるみほが崎まで見渡せば氷をとほるしがのうら浪

この歌の前々歌（一二二番）は、

中宮月次の御屏風に、月池にうつりたる所をよめる 左少将定家朝臣

あまつ風みがく雲るにてる月の光をうつすやどの池水

の歌であり、『拾遺愚草中』（一九〇〇番）、「女御入内御屏風 文治五年十二月」の「八月 人家池辺に人人翫月所」として入集している。次の一六三番歌は、

月かげはいとどくまなく空さえて秋の雨ふる松のかぜかな

の歌である。寂蓮は定家歌の『女御入内屏風和歌』の作者ではなく、この詞書は受けない。寂蓮歌は『寂蓮集』（雑纂本・一五〇番）に入集しており、詞書に「左大臣家花五十首」とある三首めの歌である。建久元（一一九〇）年九月十三日、『左大將良経邸花月百首』の「月歌五十首」中の一首と認定し考察した³⁷。この一六四番歌は「月」を歌材として詠んでおり、

『花月百首』中の「月歌五十首」中の一首とも思われるが認定を保留した。松野陽一氏は『玄玉集』の出典資料の項、「建久元（一一九〇）九・一三 花月百首 寂蓮？八（九）首（141・142・143・163・164・426？・521・522・523）」と挙げられ、寂蓮歌はすべて推定によるものとしておられる。撰集資料の調査にあたつて詞書の表記について注意する必要があることを指摘しておられる。以上の観点から『花月百首』歌としなく出典未詳とする。

歌意は、月の光が清らかに澄んでいるみほが崎まで遠く広く望み見ると、志賀の浦の遙か彼方まで氷が張りつめていることよ。

結句「志賀の浦」は、前掲『歌枕歌ことば辞典』の「志賀」の項に拠ると、

（前略）近江国の歌枕。今の滋賀県大津市。琵琶湖の西南岸の地。（中略）平安時代中期以降に歌枕としてさかんによまれるようになった。「ささ浪の（や）志賀」と続けることが多いゆえに、多く志賀の浦の浪をよんだ。たとえば「小夜ふくるままに汀や凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦浪」（後拾遺集・冬・快覚）のように「志賀の浦浪」を第五句に据えることが一つの形となった。また、浪を立たせる「風」もよくよまれ、「志賀の浦風」「志賀の山風」の形で用いられたが、比良や比叡から吹きおろす寒風、汀から沖へと凍ってゆく湖面、冴え冴えと照らす月光などを組み合わせ、凜とした冬の情景をよんだ叙景的な歌が次第に多くなった。前記の快覚の歌を本歌にした歌も多く「志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より凍りていづる有明の月」（新古今集・冬・家隆）はその代表的なものである。（後略）とある。

「みほが崎」は、『名所歌枕』『類字名所和歌集』『増補松葉名所和歌集』等、駿河国の「三保崎」として掲載し、近江国・志賀の「みほが崎」は掲載していない。

『夫木和歌抄』（卷二十六・雑部八・崎）の「みほがさき、近江又駿河」に、

建仁元年十首歌合、湖上曉霧

後法性寺入道関白

明けぬるかきりのたえ間にみほがさきこぎはなれ行くをちのつり舟 一二一八五

宝治二年百首、湖月

衣笠内大臣

あふみがたみほのみさきの浦かぜにくもらぬおきの月をみるかな 一二一八六

長寛二年八月白河歌合、月、判者俊成卿 資隆朝臣

さざ波やおほつの宮に月すめばみえこそわたれみほがさきまで 一二一八七

以上の如く「近江のみほが崎」がそれぞれ詠まれている。

寂蓮歌は前掲「志賀」の項に指摘されているように、第五句に「志賀の浦浪」を詠み、冴える月光と氷の張りつめた湖面を組み合わせて冬の情景として詠んでいる。第三句「見渡せば」の句について、石川常彦³⁸氏の考察がある。五五一番歌において初句に「見渡せば」詠んでいる。

次に四〇二番歌についてみる。

みなと河おなじうきねの浪の音もけさ立ちかはる秋のはつ風

この歌の詞書に「旅泊初秋」とあり、その歌題について『平安和歌歌題索引』（一九八六年六月初版、一九九四年十二月増補版、瞿麦会編）に拠り調査したがその歌題は詠まれていないようである。詠歌年時、出典は未詳である。

歌意は、湊河に同じく旅泊する舟で浮寝をする我が床にまで浪の音が聞こえていたが、今朝は秋の初風の音に代わっていることよ。

「みなと河」は、『能因歌枕』『名所歌枕』『八雲御抄（名所部）』『類字名所和歌集』『松葉名所和歌集』『増補松葉名所和歌集』等、摂津の国の歌枕。六甲山に発し神戸市を流れ大阪湾に注ぐ、生田・鹿と共に詠まれている。

『千載集』（巻五・秋下・三二二番）に入集している、

夜泊鹿といへるころをよめる

刑部卿範兼

みなと川うきねのここにきこゆなりいく田のおくのさをしかのこゑ

の歌の影響を承けているかと思われる。範兼歌の上句と殆ど同一であり、下句を秋の初風と変えて詠んでいる。結題の「旅泊」を「みなと河・うきね」と上句で、「初秋」を「秋のはつ風」と下句で詠んでいる。

寂蓮歌の下句「けさ立ちかはる秋のはつ風」の句は次の如く詠まれている。

『正治初度百首』（隆信、秋、一二三九番）

衣手はまだひとへにていかなれば今朝たちかはる秋のはつ風

『為家集下』（四六九番）

文永六年七月廿八日 前中将公世朝臣勸進賀茂橋下社続百首内三首

みそぎせしみたらし川の清き瀬にけさ立ちかはる秋の初かぜ

『新和歌集』（七〇五番）

河早秋

大江季房

なみのおともたちかはるなりたなかみやうぢのわたりのあきの初風

とあり、最後の季房歌は寂蓮歌と同趣向であり影響を承けているかと思われる。

次に四六八番歌についてみる。

梅が枝に軒のしがらみかけてけり花のせきもるささがにの糸

この歌は後の『夫木和歌抄』（巻三・春部三・梅、七二六番）に入集している、

百首歌

寂蓮法師

梅がえに軒のしがらみかけてけり花のせきもるささがにのいと

とあり、『玄玉集』の詞書は「題不知」とあるが、『夫木抄』は「百首歌」とあり、第四句「花のせきもる」とある。同集のみ入集の独自歌中には「百首歌」と詞書のあるものが多く、別稿³⁹で考察したので参照されたい。この歌は「梅」を歌材として詠んでいる。何れの折りの詠歌か決定し難く、詠歌年時、出典未詳とする。

歌意は、梅の枝に軒から堰き止める柵を掛けていたよ。梅の花の関守を勤めている蜘蛛の糸がよ。

『寂蓮集』（二二七番）に「蜘蛛の糸」を詠んだ歌がある。

権別当範玄当、夕落花

かぜ吹けば軒の木のまをつたひきて花もふるまふ蛛の糸
次に五五一番歌についてみる。

見わたせばならの都の花ざかり梢をこむるやへの白雲

この歌の詠歌年時、出典については、『玄玉集』の五四六・五四七番歌に、

百首の歌に、花の歌とてよみ侍りける 侍従家隆

よしの山霞も花の色ならばいく重かみましみねの白雲 五四六

世中を思ひつづけて見るときもちるこそ花の盛なりけれ 五四七

とあり、家隆歌は、『壬二集』（春十五首、二〇九・二一四番）に入集の『殷富門院大輔百首文治三年春于時侍従兼越中守従五位上』の歌である。

次の五四八番歌は、

藤原知資

身のうさを花になぐさむ程だにもつらみは風に絶えせざりけり

とあり、知資は『殷富門院大輔百首』の作者ではなく、家隆歌の詞書は受けない。

次の五四九・五五〇番歌は、

太輔

うき世をばまたなにかはなぐさめん花に先だつ命ともがな 五四九

今よりは花のたよりに人またじちればわかるる思ひそひけり 五五〇

とあり、殷富門院大輔は百首を各歌人に勧進しているが、証本は現存せず、前掲の家隆、他に定家・公衡の百首が家集に完存するのみで、他の歌人の百首は一部のみしか現存しない。五四九番歌は『殷富門院大輔集』に入集していないが、五五〇番歌は同集（三三番。結句「なげきそひけり」）に入集している。詞書に「はなまらうどをとどむ」とあり、百首歌ではなく、家隆歌の詞書は受けない。寂蓮歌も同様であり、詠歌年時、出典は決定し難く未詳とする。

歌意は、奈良の都を遠く広く望み見ると、花（桜）が盛んに咲いていることだ。花の梢をおおい隠すほど幾重にも重なっている白雲よ。

寂蓮歌は、匡房の『江帥集』（三〇番）に入集している。

ならの京の花

さくらさくならのみやこを見わたせばいづこもおなじやへのしらくも

の歌及び『俊成五社百首』（春日社百首和歌、桜、二二〇番）に入集している、

これぞこの奈良の都の花ざかりこりかさなりてにはふしら雲

の歌の影響を承けて詠んでいるかと思われる。寂蓮歌の初句「見渡せば」の句について、石川常彦⁴⁰氏の考察がある。一六四番歌において第三句に「見渡せば」を詠んでいる。

次に六三三番歌についてみる。

此世にて物思ふ袖もくたしけり雨そそきする軒の橘

この歌の詠歌年時、出典は詞書に「題不知」とあるのみで、「橘」を歌材として詠んでいる。何れの折りの詠歌か決定し難く、詠歌年時、出典は未詳とする。

歌意は、この世で物思いにふける涙で濡れた袖も朽ちさせたことだ。雨の降りかかる軒近い橘はよ。最後に七二五番歌についてみる。

昔おもふ池にはいひもくちはててかれ野につづく蘆の上風

この歌は『拾玉集』（第五・五一五・五一五三番）に次の如く入集している。

寂蓮入道、昔おもふいけにはる井もくちはてて枯野につづくあしのうら風、と古池寒蘆によみたり、とかたりし朝に雪ふりしかば、よみてつかはす

昨日ききし枯野のかぜを身にしめてけふの心は雪にむもれぬ 五一五二

返し

寂蓮

あはれしるころを雪にむすばずはかれの末に色を見ましや 五一五三

とあり、詞書に寂蓮歌が引用され、慈田と寂蓮の贈答が交わされている。この歌の詠歌年時は、『拾玉集』（第五）の巻頭部分は慈田と寂蓮の贈答歌（五一二・五一三番）に始まり、およそ、年代順に配列されている。前後の歌の関係から文治五（一一八九）年冬頃の詠歌かと思われる。

寂蓮歌（七二五番）の歌意は、昔のことが思い出されることよ。池にあった「槓^い」（板で箱のように作って、地中に埋めて置き、水を出し入れするもの）も朽ちてなくなってしまうと、冬枯の野原の蘆の葉の上を風が吹き渡って行くことよ。

『拾玉集』の詞書の意は、寂蓮入道が、「昔おもふいけにはる井もくちはてて枯野につづくあしのうら風」と「古池寒蘆」という趣旨で詠みました。と話した翌朝に雪が降りしたので、詠み贈りました。

慈田歌（五一五二番）の歌意は、昨日聞いたあなたの「枯野の風を」の歌は、身にしみて感じられ、心の奥にしみとおら

せて、今日の気持は雪に埋もれてしまったことよ。

寂蓮歌（五一五三番）の歌意は、あなたがしみじみとした趣のある気持を雪の歌として詠まなかったならば、私は先に（昨日）冬枯の情趣ある景色を見なかったであろうなあ。

寂蓮と慈円は親しい関係にあり、文治三（一一八七）年十一月二一日頃、『結題百首』を共に詠み、前掲『拾玉集』（第五・五二二―五二三五、五一四三・五一四四、五二五八―五二六九、五二七八―五二八四番）には数多くの贈答歌が見受けられる。

寂蓮歌（七二五番）は『後拾遺集』（卷十八・雑四・一〇五三番）『範永集』（九番）に入集している、

関白前大まうちぎみいへにてかつまたのいけをよみ侍りけるに 藤原範永朝臣

とりもるでいくよへぬらんかつまたのいけにはいひのあとだにもなし

の歌の影響を承けて詠んでいるかと思われる。範永歌の下句を踏まえて詠み、池は勝間田の池のことを詠んでいるか。結題の「古池」を「昔おもふ池」と初・二句で、「寒蘆」を「かれ野につづく蘆」と下句で詠んでいる。

「勝間田の池」は、前掲『歌枕歌ことば辞典』の同項目に拠ると、

大和国の歌枕。『万葉集』卷十六に「勝間田の池は我しる蓮なししかいふ君が鬚無き如し」の歌がみえるが、これは今の奈良市の西の京の唐招提寺と薬師寺の近くにあった池だと考えられている。しかし、平安時代以降になると、美作国（和歌初学抄）・下野国（五代集歌枕）・下総国（八雲御抄）など、その所在地について諸説があった。また、そのイメージも、『万葉集』のそれとは違って、水鳥もすまない池という把握が普通になった。「鳥もるで幾よへぬらん勝間田の池にはいひのあとだにも無し」（後拾遺集・雑四・範永）や「水無しと聞きてふりにし勝間田の池改むる五月雨のころ」（山家集）などがその例である。

としておられる。

以上、生存時の『言葉集』『月詣集』『玄玉集』について考察した。没後成立の作品として『御裳濯集』があるが、すべ

て『西行勸進二見浦百首』（十四首入集）の詠歌であり、独自歌もなく、既に拙著において考察を加えたので省略する。該当の項を参照されたい。

五 『万代和歌集』

この作品の従来の研究については、川瀬一馬・安井久善・深谷礼子・福田秀一・安田徳子・有吉保・後藤重郎・樋口芳麻呂・拙著⁽⁴⁸⁾の各氏に拠って考察されている。撰者・成立・内容・伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

撰者は、奥書の署名に「浅香山斗藪侶釈判」とあるが、仮の名であり、真観（藤原光俊）・藤原家良とする両説がある。初撰本は岡山大学池田家文庫蔵「歌書目録」に「万代和歌集 真観撰」とあることから反御子左派の指導者であった真観とされ、再撰（奏覧）本は『秋風抄・序』に「今の内相府の撰集」とあり家良と推定されている。

成立は、初撰本は宝治二（一二四八）年夏に一旦成立し、同年暮秋に修訂を加えた。再撰本は建長元（一二四九）年冬、後嵯峨院の勅があつて同院の御製を入れるなど改修し奏覧されたとされている。

内容は、二〇巻に分ち、春（上・下）・夏・秋（上・下）・冬・神祇・釈教・恋（二・五）・雑（二・六）・賀に部類され、勅撰集と同一形式である。歌数は三八二六首（竜門文庫本）である。

入集歌人は、読人しらずの他、上代より当代までの歌人七四二名の詠歌を収めている。歌数の多い歌人は和泉式部の一・二一首を最高として後鳥羽院・定家・家隆の六七首、西行・四九首、貫之・好忠の四四首、俊頼・四一首、俊成・三九首、道家・三八首、実朝・三七首、相模・三六首等、撰者と推定されている家良・十首、真観・七首であり、寂蓮は十六首入集している。入集歌は前代歌人を重視し、拾遺時代から新古今時代の歌人詠が多い。

伝本は、すべて初撰本系で、再撰（奏覧）本は現存しない。撰者自筆本とされている、竜門文庫本があり、現存の諸本

はすべて同本を祖本としている。『新編国歌大観 第二巻』所収『万代和歌集』（後藤重郎・安田徳子両氏担当）も竜門文庫本を底本としている。以下その本文に拠る。

寂蓮の入集歌は十六首ある。以下入集番号を記す。卷一・春上・一六、卷二・春下・四〇〇、卷四・秋上・九四二、卷六・冬・一三〇一、同・一四一六、卷九・恋一・一八三四、卷十・恋二・二二一一、同・二二二三、卷十一・恋三・二二五一、卷十三・恋五・二五九〇、卷十五・雑二・二九八九、同・三〇三五、同・三〇九〇、卷十六・雑三・三一七五、卷十七・雑四・三三八八、卷十九・雑六・三六五一番歌である。以上の内十四首は他の撰集等に入集しており、二首が『万代集』のみ入集の独自歌である。和歌を示す。

卷二・春下

（花の歌）

寂蓮法師

四〇〇 身にしめてなにおもふらむやまざくらはなもつき世のいろならぬかは

卷九・恋一

（題しらず）

寂蓮法師

一八三四 よそに見てふしみもしらぬこはたがはこはたがゆゑにぬるるたもとぞ

先ず四〇〇番歌についてみる。

身にしめてなにおもふらむやまざくらはなもつき世のいろならぬかは

この歌の詠歌年時、出典は詞書に「（花の歌）」とあるのみで、「山桜」を歌材として詠んでおり、未詳である。

歌意は、山桜はその身に深く浸み通らせて何を気にやんでいるのであろうか。花もこの悲しみや心配ごとの多い世の中の風情でないだろうか。いやそうであらうよ。

次に一八三四番歌についてみる。

よそに見てふしみもしらぬこはたがはこはたがゆゑにぬるたもとぞ

この歌は後の『夫木和歌抄』（巻二十四・雑部六、河、一一一六六番）にも入集している。

こはた川、木幡、山城又近江

家集

寂蓮法師

余所に見てふしみもしらぬこはた川こはたがゆゑにぬるたもとぞ

この歌の詠歌年時、出典は『万代集』は詞書「題しらず」とあり、『夫木抄』には「家集」とあるが、現存の『寂蓮集』には入集していない。『夫木抄』入集歌中「家集」とするものは七首あるが現存『寂蓮集』に入集しており、他に現存の家集以外のものは想定し難く不審である。従って詠歌年時、出典は未詳とする。

歌意は、無縁に見て伏見（臥し身）、臥してくれることもない木幡川よ。これは誰のせいで涙で濡れる袖であることよ。

寂蓮歌は『拾遺集』（巻十二・恋二・七〇六番）に入集している、

（題しらず）

よみ人しらず

こはた河こはたがいひし事のはぞなきなすがむたきつせもなし

この歌の影響を承けているかと思われる。拾遺集歌の「こはた河こはたがいひし」の句を用い、同音反復で「こは誰が故」を導く表現として詠んでいる。

「伏見」は山城国の歌枕、現在の京都市伏見区伏見の地。「臥し身」と掛けて詠む。

「木幡川」は山城国の歌枕。現在の京都府宇治市木幡町を中心として北は山科、西は巨椋池にも及ぶ広い地域。

寂蓮歌は後の『歌枕名寄』（巻一・二〇四番、山階篇、木幡）、同（巻三・一一二一番、里、万代、木幡河）に入集している。

ここで以上のまとめをする。本稿で採り上げた私撰集の『言葉集』には三首入集し、独自歌は二首であり、『月詣集』は十一首入集し、独自歌は三首、『玄玉集』は三三首入集し、独自歌は七首、『万代集』は十六首入集し、独自歌は二首で

ある。以上の私撰集に六二首入集し、独自歌は十四首である。その内四八首については他の撰集に入集し、既に拙著において考察を加えたので省略し、十四首について考察した。その内詠歌年時、出典が判明するのは、『言葉集』(二二七番)、『月詣集』(一五二番)、『玄玉集』(一五二番?、七二五番)のみであり、その他の詠歌は未詳である。

本歌取歌、影響歌については、『言葉集』の七七番歌は『続拾遺集』の平頼泰歌に影響を与えているか。『月詣集』の一五二番歌は『千載集』『頼政集』に入集している頼政歌の影響を承けて詠んでいるか。『玄玉集』の四〇二番歌は『千載集』の範兼歌の影響を承けているか。『新和歌集』の季房歌は寂蓮歌の影響を承けているか。同集の五五一番歌は『江師集』(匡房)、『俊成五社百首』(俊成)の影響を承けているか。同集の七二五番歌は『後拾遺集』『範永集』の範永歌の影響を承けているか。『万代集』の一八三四番歌は『拾遺集』歌の影響を承けてそれぞれ詠んでいるものかと思われる。寂蓮の生存時代、没後の私撰集に多く入集し、独自歌について考察してきたがそれぞれの時代において評価されていたことをうかがうことができる。

注

- (1) 拙著『寂蓮の研究』(平成8年3月、勉誠社)
- (2) 安井久善「夫木抄にみえたる散佚撰集について、(リ)言葉集」後に『改訂中世私撰和歌集攷』(昭和26年1月初版、同36年12月改訂再版、三崎堂書店)に所収。
- (3) (A)井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』(昭和53年10月初版、昭和63年10月増補版、笠間書院)、第六章 寿永百首家集をめぐって、十四 広言 (B)同『言葉集』雑感「(和歌史研究会会報」第100号—記念特集—、平成4年12月)
- (4) (A)松野陽一『言葉集』(惟宗広言撰)について「(和歌史研究会会報」第76号、昭和56年6月)。後に『鳥帚 千載集時代和歌の研究』(平成7年11月、風間書房)、II 私撰和歌集本文考、〈余滴〉(ア)に所収。
(B)同「広言・広言集」(和歌大辞典、昭和61年3月、明治書院)
- (C)同「言葉集和歌集の構成—恋下部の寄物型題配列の編集意図—」(『和歌文学の伝統』、有吉保編、平成9年8月、角川書店)
- (5) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「広言」(昭和57年5月、桜楓社)
- (6) 長谷完治「言葉集」(『和歌大辞典』)

- (7) 今岡典和・岩坪健「目録調査中間報告」(「しくれてい」第19号、昭和61年12月)
- (8) (A) 赤瀬信吾・岩坪健「言葉集」(『新編国歌大観 第十巻』、平成4年4月、角川書店)、翻刻と解題。
(B) 同『冷泉家時雨亭叢書 第七巻 平安中世私撰集』(平成5年8月、朝日新聞社)、影印と解題。
- (9) 拙稿「惟宗広言・惟宗広言集」(『日本古典文学大辞典 第二巻』、一九八四年一月、岩波書店)
- (10) 谷山茂「千載集と諸私撰集」(『人文研究』昭和26年11月、同年12月、同27年1月。後に『谷山茂著作集三 千載和歌集とその周辺』(昭和57年12月、角川書店)、第三章 千載集と諸私撰集に所収。
- (11) (A) 松野陽一「平安後期作品研究・私撰集について」(『国文学』学燈社、昭和40年3月)
(B) 同「和歌史研究・平安末期私撰集の研究(1)」(『文芸論叢』第3号、昭和42年2月)
- (12) 谷鼎「月詣和歌集」(『群書解題』第九巻、和歌部(三)、昭和35年11月、続群書類従完成会)
- (13) 島津忠夫「月詣和歌集」(『和歌文学大辞典』、昭和37年11月、明治書院)
- (14) (A) 杉山重行「月詣和歌集の諸本と成立」(『語文』第28輯、昭和43年3月)
(B) 同「月詣和歌集の考察―歌人構成・入集資料を中心として―」(『和歌文学研究』第24号、昭和44年6月)
(C) 同「月詣和歌集」(『和歌大辞典』)
(D) 同「月詣和歌集」(『新編国歌大観』第二巻 私撰集編 昭和59年3月、角川書店)、翻刻と解題。
(E) 同「月詣和歌集の校本とその基礎的研究」(昭和62年3月、新典社)
- (15) 多賀宗準「月詣和歌集について」(『大正大学研究紀要』第61輯、昭和50年12月)
- (16) 川上新一郎「賀茂社家の歌人たち」(『和歌文学研究』第42号、昭和55年4月)
- (17) 大取一馬「月詣和歌集に関する二・三の問題 付祐盛法師家集稿」(『高野山大学国語国文』第8号、昭和57年3月)
- (18) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「月詣和歌集」
- (19) (A) 拙著『寂蓮法師全歌集とその研究』(昭和50年3月、笠間書院)、本文編 V 1月詣和歌集。研究編 第一章・V 1月詣和歌集。
(B) 拙稿「月詣和歌集」(『日本古典文学大辞典 第四巻』、一九八四年七月)
- (20) 谷山茂、注10の論
- (21) (A) 森本元子『私家集の研究』(昭和41年11月、明治書院)、(付)賀茂社奉納百首家集について、227～230頁。
(B) 同『私家集と新古今集』(昭和49年11月、明治書院)、第一部・第十章、寿永百首家集と新古今集、244～268頁。
- (22) 杉山重行、注14・Bの論
- (23) (A) 松野陽一「寿永百首について」(『和歌文学研究』第31号、昭和49年6月。後に注4・Aの著書、IV(3)寿永百首について―賀茂社歌圈と仁和寺歌圈―、394～412頁に所収。
- (24) (B) 同「寿永百首」(『和歌大辞典』)
井上宗雄、注3 Aの著書、第六章 寿永百首家集をめぐって、419～526頁。

- (25) (A) 有吉保「隆房とその家集」新資料「隆房集」は寿永百首家集か―(「語文」第88輯、平成6年3月)、後に『新古今和歌集の研究 続篇』(一九九六年三月、笠間書院)、第六章・第三節、494頁515頁に所収。
(B) 同編『和歌文学辞典』所収「寿永百首」
- (26) 杉山重行、注14・Eの著書、研究編・第二章・1賀茂重保年譜の項。治承二年(一一七八)六十歳〇八月二十三日、林葉集成。これ以前、重保、越中国へ下向するか、その折、寂蓮・敦仲・俊恵ら、歌林苑にて餞の歌をおくる(月詣集一五二・一五三、林葉集九八八)。また、一五二番歌頭注。〇重保の越中国下向年時は定かでないが、餞の歌が「林葉集」にも見えるので、治承二年八月以前か。とある。
- (27) 安井久善「玄玉和歌集攷―その成立と撰者―」、注2の著書に所収。
- (28) 島津忠夫「俊恵法師をめぐる」(「国語国文」昭和28年12月)、後に『和歌文学史の研究―和歌編―』、平成9年5月、角川書店)に所収。
- (29) 樋口芳麻呂「玄玉和歌集」(『群書解題』第七卷、和歌部(二)、昭和36年7月、続群書類従完成会)
- (30) 佐山渚「玄玉和歌集」(『和歌文学大辞典』)
- (31) 山田昭全「上覚・千覚と玄玉集の撰者」(「国文学踏査」第7号、昭和38年3月)
- (32) (A) 松野陽一「玄玉和歌集考」(「立正学園女子短大紀要」第14集、昭和45年12月)、後に注4・Aの著書、Ⅱ私撰和歌集本文考(4)玄玉和歌集考に所収。
(B) 同「平安末期私撰和歌集の研究(4)玄玉集の構成」松野ゼミナール(「文芸論叢」第7号、昭和46年3月)
(C) 同「玄玉集」(『和歌大辞典』)
(D) 同「玄玉和歌集」(『新編国歌大観 第二巻 私撰集編』、翻刻と解題。
- (33) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「玄玉和歌集」
- (34) 青木賢豪「玄玉和歌集」(『日本古典文学大辞典 第二巻』、一九八四年一月)
- (35) 拙著、注19・Aの著書、本文編V2 玄玉和歌集。研究編第一章・V2 玄玉和歌集。
- (36) 久曾神昇『顕昭・寂蓮』(昭和17年9月、三省堂)、第一節・四 行脚。294頁295頁。
- (37) 注1の拙著。第一章・第二節「寂蓮集」150番の項、188頁参照。
- (38) 石川常彦「見渡せば」考―第三句「見渡せば」の新古今への変遷―(「武庫川国文」第4号、昭和47年3月)、後に『新古今の世界』(昭和61年6月、和泉書院)、第一部 新古今の表現 二に所収。
- (39) 拙稿「寂蓮の『夫木和歌抄』入集歌について―四季部所収歌を中心として―」(「語文」第99輯、平成9年12月)
- (40) 石川常彦「続『見渡せば』考―初句「見渡せば」の新古今への変遷―」(「武庫川女子大学紀要」第19号、昭和47年10月)、後に注38の著書、第一部 新古今の表現 三に所収。
- (41) 川瀬一馬「撰者自筆の万代和歌集」(『日本書誌学の研究』、昭和18年6月原版、同46年11月再版、講談社)
- (42) (A) 安井久善「万代和歌集撰者考」(「古典論叢」第4号、昭和27年1月)

- (B) 同「右大弁光俊攷」、後に(A)と共に注2の著書に所収。
- (C) 同『藤原光俊の研究』(昭和48年11月、笠間書院)、第二章・第五節「万代和歌集」、131頁、134頁。
- (43) (A) 深谷礼子「万代和歌集和歌初句索引・作者別索引」(『愛知学芸大学国語国文学報』第7集、昭和33年2月。第10集、同34年11月)
- (B) 「『万代和歌集』の撰者をめぐって」(『文学・語学』第22号、昭和36年12月)
- (44) (A) 福田秀一「万代和歌集」(『和歌文学大辞典』)
- (B) 同「万代和歌集」(『和歌大辞典』)
- (45) (A) 安田徳子「『万代和歌集』に関する一考察―成立と歌人の面から―」(『名古屋大学国語国文学』第40号、昭和52年7月)
- (B) 同「万代和歌集伝本考」(『文学・語学』第86号、昭和54年8月)
- (C) 同「万代和歌集」(『新編国歌大観 第二巻 私撰集編』、翻刻と解題、後藤重郎共著。
- (46) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「万代和歌集」
- (47) 後藤重郎「万代和歌集」、注45・C、安田徳子共著。
- (48) (A) 樋口芳麻呂「『万代和歌集』の奏覧本について」(『和歌史研究会会報』第59号、昭和51年3月)
- (B) 同「万代和歌集」(『日本古典文学大辞典 第五巻』(一九八四年一月)
- (49) 拙著、注19・Aの著書、本文編V4 万代和歌集。研究編 第一章・V4 万代和歌集。
- (付記) 本稿を成すにあたって菅根順之氏に種々ご教示いただきましたこと、厚くお礼申し上げます。
- 昨年の秋、花見一郎リオポルド氏(現在、ジョージワシントン大学)が、スタンフォード大学へ請求の博士論文を刊行された。「THE PRIEST JAKUREN AND HIS POETRY」(1997, UMI, A Bell & Howell Company)と題し、三三一頁から成る。寂蓮の研究書である。